
トライアングル・LOVE

小鳩ヒナコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トライアングル・LOVE

【Nコード】

N6379D

【作者名】

小鳩ヒナコ

【あらすじ】

中学からの美貌の恋人と、高校からの成績優秀な親友が、恋仲に…。三角関係を描いた青春ラブストーリー！。

ブローグ

和尚。おまえを親友にしたのが、ぼくの間違いだった。

目の前で、一機の旅客機が、だだっ広い滑走路を離陸していく。

和尚を乗せたノースウエスト航空機。

ぼくの、最高の親友だった男。

ぼくのそばに、愛子がやって来る。

「あれ？結花は？どこへ行ったの？」

ぼくは、その質問には答えられない。

ただぼくは、大空に向かって、ぼくら3人の青春小説の終わりを
見つめていた。

第1話（和久井尚人“和尚”）

《和尚》とは、高校1年生の教室で初めて出会った。
出席番号が前後だったのだ。

先生に決められた出席番号順に座ろうとすると、前の席の長身の男がぼそつとつぶやいた。

「あれ？おれ、今年は最後じゃないんだな」

「ぼくだよ、このクラスの最後は。渡辺翔っていうんだ。よろしく」とぼくは自己紹介した。

「おれ、和久井尚人」

和久井の身長は、185cmはあるかと思われた。

彼は、モデルかと思うくらい均整の取れた身体と、彫りの深い白人系の顔立ちをしていた。

「よく外国人に間違われたい？」とぼくはなれなれしく言った。

「半分はそうだよ」

「やっぱり」

「そのうち、日本かアメリカか、どっちかの国籍に決めるつもり」

「で、どっちにすんの？」

「うーん」

彼は、真面目な顔をして、

「“ニッポン・チャチャチャ”と“USA!”のどっちが応援のしがいがあるだろう」

と馬鹿げた質問をしてきた。

ぼくも負けずに、

「チャチャチャに決まっているだろう」

と出鱈目を言ってみた。

「ほう。なぜそう言える？」

「だって、USA!はただの4分音符の塊じゃないか。チャチャチ

「やはそれになんと、16分音符が加わるんだぜ？」

「なるほど。声援の難易度がより高いというわけか」

「きみにナシヨナリズムが芽生えていないのは、同級生のぼくとしてはじつに遺憾だ」

ぼくは、意味もなく威厳を示してみせた。

「それで、おれをどうしようっていうの？」

「そうだな。まず、きみの愛称を決めてやるよ。《和尚》でどうだ？」

「《和尚》？　なんだ、それは」

白人顔の和久井が、情けない表情になった。

「和久井の和と尚人の尚をとって、和尚。これできみも立派な日本人だ」

「ひでえなー」

「ぼくのは、翔でいいよ」

和尚はにっと笑い、ぼくをめがけて拳を突いた。これで、ぼくらの友人関係は成立した。

出会ったときの和尚はこんなだったが、彼は決して人なつつこい性格ではなかった。

気がつけば、和尚がよく行動をとにする親友といえば、ぼくぐらいなものだった。

なにしろ、外見があまりにモデルなせいか、どこか近寄りがたい雰囲気があるらしく、とくに女子が彼を遠巻きにして見ていた。

それと、和尚は、勉強がおそろしくできた。

初めての中間テストでは、2位をぶつちぎって堂々の学年トップだった。

「和尚、おまえ、そんなに勉強できるのに、なんでこの高校に来たの？」

「この高校だって、いいじゃないか」

「でも、ダントツすぎるよ。ラサールとか灘とか、ほかにも行くと

ころがあつたでしょ」

「おれ、近いところがいい」

ぼくは、和尚のそんな素朴なところが気に入っていた。

しかし、じつは彼の頭脳は、もっと狡猾で計算高いものだった。

第2話（桜井結花）

「…こんなやつがいるんだよ」

と、ぼくは結花に笑いながら和尚の話をした。

結花とぼくは、中学3年生の修学旅行のときから付き合っている。彼女は、全校男子生徒の憧れの的といってもいいくらいの美女で、はじめ、ぼくが交際を申し込んだときにOKがもらえるとは思っていなかった。

ぼくは、彼女に、京都の和紙でつくった小さな人形をあげた。

結花は、恥ずかしそうに「うれしい。ありがとう」と言って、大きな瞳をぼくに向けた。

ぼくが、ほんとうに結花に惚れたのは、その瞬間だったかも知れない。

彼女は、のちに、ぼくの申し込みをOKしてくれたのは、「優しいそんな人だったから」だと教えてくれた。

ぼくは、自分が優しいと思ったことは一度もなかったので、その言葉には不思議な気がした。

とにかく、こんな美女を自分の手中におさめておけることは、ぼくの男としての最大の勲章だった。

「わたしにも友だちできたのよ。愛子っていうの」

「へえ。どんな子？」

「えつとね。すごく頼りになるしっかりした子」

「ははあ。女子高だと、バレンタインデーに女子からチョコをもらったりするタイプだな」

結花はくすくすと無邪気に笑った。

「そうそう、そんな感じ。きっとあの子、バレンタインデーにチョコもらうと思う」

結花の通うことになった高校は、いわゆるお嬢様の集まる女子高

だった。

ぼくは、彼女が、いろんな男子生徒の目に触れるチャンスが少ないことに、少し安心していた。

「高校1年の目標はー」

結花は、桜の舞い落ちる公園のすべり台から降りてみせた。

あーあ。また、ジーンスの後ろを汚して。

「翔ちゃんとずっと仲良くいられること！」

「それなら大丈夫。ぼくは浮気な男じゃないからね」

「ふふふ。じゃ、翔ちゃんの目標は？」

ぼくのあたまにはっとひらめいたのは、ただ一つ　それは、結花と絶対やってやる！ということだった。

ぼくらは、まだたまに軽いキスをする程度だった。こんなので、男子高校生が納得するわけないだろ。

でもぼくは、

「ぼくの目標は、パイロットになることだよ」と平然と嘘をついた。

「ずいぶん、派手ねー。だいいちそれ、高校生活の目標じゃないし」「一日一日が未来をつくるんだよ。だから、今年も来年も再来年も、ぼくの目標はパイロットになること」

そんな話をして、夕暮れになるとちょっと手を握って別れた。

結花が、まっすぐな髪をひるがえして、盛大なバイバイをしている。ぼくは、につこりと彼女を見送って、平和なデートをしめくく。

「あーあ…それにしても」

ぼくは、ため息まじりに帰り道を歩いた。

「結花と一緒にになれるのは、いつのことなんだろう？」

それは、遠い遠い未来のような気がしてならなかった。

そのときのぼくは、少女が急速に脱皮するときのことを、まった

く知らなかったから。

第3話（和尚の経験）

「なあ。どう思う？和尚」

ぼくらは、ある夏の始まりの午後、サンドイッチを食べながら窓際に日向ぼっこしていた。

「どうって。セックスのやり方くらい、自分で覚えろよ」

和尚は、ジイドの『狭き門』を読みながら言った。彼の物言いは、いつも簡潔明瞭で素早かった。

「いや、聞きたいのは、どうやって彼女をその気にさせられるかで」

「そりゃ、彼女しだいだよ」

「聞くけど、おまえ、したことあんの？」

「あるさ」

「どこで？」

「隣の家だよ」

「隣の家？？誰と？！」

「5歳年上の大学生のお姉さんと。西瓜切ってあげるから部屋においでって呼ばれたんだ」

「うは！西瓜で買われたのかよ」

「1年間くらい続いてたかな。いい勉強になったよ」

「おまえ、…尊敬するぞ」

「でも、おれは自分からはなにもしていない。だから、ほんとうのことを言つと、翔にするアドバイスはないんだよ」

ぼくは、和尚にそう言われて弱ってしまった。

仕方ない、これはチャンスを待つしかないなとモヤモヤを抱えつつ、次の授業の準備を始めると、こっそり和尚がささやいた。

「よかつたら、おれの部屋使えよ」

「え？」

「おれ、離れに一人寂しく住んでるから。いざコトというときは、おれ、母屋の方に行くよ」

「…恩に着る」

と言ったものの、ぼくにはその実行力があるとは、到底思えなかった。

ぼくは、ぼくにもレクチャーしてくれるお姉さんがいないものかと、ふと考えて、首を横に振った。

後ろから見る、和尚の背中は大きかった。これが、やったことのある男の深みってやつなのか？

ぼくの背中はどうだろう。結花の身体を、守ってやる事が出来るだろうか。

ぼくは、まだまだ子どもだった。和尚と比べると、自分がとても小さく見えた。

第4話（7月の海へ）

「ねえ翔ちゃん。翔ちゃんの高校の文化祭、招待して？」

7月のなかば、結花がこんなことを言ってきた。

「もちろん、そのつもりだけど、どうして？」

「愛子が友だち募集中なの。うちは女子高でしょ。それでけっこういろいろと大変なの」

「ははあ。彼氏探しか。うちの高校、いいのいないぞ？」

「でも、和尚さんにも彼女いないんでしょ？」

「あいつか、あいつはな……」

和尚には、正直言つて、たくさんのラブコールが届いていた。でかくて強い身体に学力優秀とあれば、順当に考えて、よりよい子孫を残そうとする女性が多く集まることだろう。

ぼくは、なんで自分のような男に結花がついてきてくれるのか、この頃、よくわからなくなることがあった。

「優しいからいい」って言うけれど、ぼく程度の男なら、結花の美貌ならいくらでもつかまえられるだろう。

「でも、ちょっと時期が早すぎるな。文化祭は9月だからな」

「えー。愛子が和尚さんに会いたいわって言うてるのにな」

「結局、和尚狙いかよ。あいつは難しいぞ」

「ねえ、文化祭のまえに、4人でどこかへ行けないかな？」

「仕方ないな」

ぼくは、結花の友だち思いに付き合つてやることにした。

「でも、繰り返し言うけど、和尚は固いぞ」

だが、和尚に話を持ちかけると、彼は意外と乗ってきた。

「海なんかいいね。おれ、太陽大好き」

こうして、ぼくらは、電車に乗って、海水浴へ行くことにした。

「はじめましてー」

と活発そうな、賢そうな、短髪の女の子が、挨拶する。

この子が愛子か。

ぼくらは、お互い自己紹介をし合ったあとで、男女に分かれて車内でおしゃべりしていた。

海に着くと、さっそくぼくらは水着に着替えて、まずは波打ち際ではしゃいだ。

「わたし、沖へいくわ」と愛子が言う。

「いいね。おれも」と和尚が続く。

「あいつら、けっこういい感じじゃないのー」

とぼくは、波に乗ってすいすい泳いでいく二人を見ながら、結花を振り返った。

「う…うん。そうだね」

結花は、なぜか硬直していた。

「どうしたの？」

「うん…なんか、わたし、和尚さんって苦手かも」

「え？」

「なんか、あの怖い…。なんでだろう」

「なんで？ いいやつだよ。頭が回りすぎる嫌いはあるけど」

「ううん。そういうのじゃなくて…なんか…身体も大きいし…」

結花は、あたまが混乱しているようだった。

ぼくは、彼女を休ませるために、波打ち際から上がり、砂の上に二人で寝そべった。暑い砂が気持ちいい。

「どう？ ちょっと気分はましになった？」

「うん。大丈夫。わたし、なんか変ね。熱があるのかな」

「まじで？」

ぼくは、結花の額に手をあててみたが、すでに温められた手で、体温が測れるはずもなかった。それをしたのは、たんに、ぼくが彼女に触れたかったからだ。

「なにか、飲み物を買ってきてやるよ。なにがいい？」

「じゃ、…冷たいオレンジジュースかなんか、いい？」

「おっけ」

ぼくは、立ち上がって、バカみたいに値段の高いオレンジジュースを買いに、海の家へ歩いていった。

そのあいだ、結花はじつと身じろぎもせず、波間を見つめていた。

「ただいまー」と、和尚と愛子が、明るい笑顔で帰ってきた。

「和尚、泳ぐの上手いね」

「おれ、サンフランシスコ生まれなのよ」

「なんだ。じゃあ、音楽聴きながらローリースケート履いてたわけね」

「そう、ロックンロールを聴きながらね」

「何年代の人なのよ、それ」

彼らは、冗談を言って笑いあっていた。ぼくも、つられて笑っていた。

でも、ぼくはなにか空気の異変を感じていた。それは、結花の様子がおかしかったからだだった。

夕焼けとともに、ぼくらは海をあとにし、電車に再び乗った。

和尚と愛子は、相変わらず、くだらない冗談を続けていた。和尚にしては、それは珍しかった。ぼくは、こんなに昂揚した和尚を見るのは初めてだった。

「愛子のこと、気に入ったのかな…」

ふと、ぼくの横にいる結花を見ると、彼女の視線は和尚に釘付けになっていた。

ぼくは、なんだか少し、嫌な予感がした。和尚は、柄にもなくバカ騒ぎを繰り広げている。

ぼくは、彼の冗談が、愛子を楽しませるものではなく、なにかから逃げ出すために行っている作業だという気がした。

それは、どうにも拭い去れない直感のようなものだった。

でも、ぼくは、その気持ちに蓋をして、結花の肩をそつと抱いた。

第5話（結花の変化）

海から戻ると、夏休みが待っていた。

ぼくと結花は、あちこちデートした。それこそ、近所の盆踊りから水族館なんかまで。

「ねえ、この頃、あんまり手をつながないね」

ある日、ぼくは街の雑踏のなかで結花に言った。

「え？そうかなあ？…翔ちゃんの思い過ごしだよ」

「じゃ、つなごうよ」

ぼくらは、いつものように手をつないだが、どことなくぼくは、ぎこちなさを覚えた。

まるで、結花は、その手にのみ神経を集中して、身体をこわばらせているようだった。

こんなことは、いままでなかった。

ぼくはそつと結花を盗み見た。彼女は、最近、見違えるほど美しくなっていた。

まえから美少女だと周りから言われてきたけれど、いまは幼さがぬけて、一片のもろさを秘めた思春期の美しい女性になっていた。

もう、結花は、すべり台から降りて、ジーンズを汚したりしない。

ぼくは、彼女の内部で、なにか変化が起こったのを悟った。

ぼくは、ふと和尚の存在を思い出した。結花は和尚のことを「怖い」と言った。

でも、それはたんに、彼女がいままで成熟した大きな男性の身体を意識したことがなかったからじゃないのか？

ぼくは、自分の発想に、ぎょつとした。

そうだとすれば、ぼくはいままで結花に、男として見られてなか

ったということになるじゃないか。

こんな大事なことを、ぼくはずっと放置しておくわけにはいかなかった。

駅の改札を出たとき、ぼくはふとした瞬間を盗んで、結花にキスしようとした。

でも、彼女はぼくの動作をすつとかわして、何気ない調子で歩き続けた。

決定だ、

ぼくは予期せず、自分の勘が当たったことに、がくぜんとした。

結花は、和尚に恋をし始めている。

間違いない。

「おい、どうした？」

和尚の長い脚に蹴られて、ぼくははつとした。

ホームルームの時間だった。ぼくは、議長から、名指しで意見を求められていた。

「はいっ……」

ぼくは、あわてて返事した。周りが、どつと騒ぐ。

「え？なにこれ」

「聞いてなかったの、翔？文化祭でやる題目だよ」

「なに？」

「おまえ、いま、ミスコンに賛成したの。あんまり決まらないから、次のやつの意見にみんな従おうってことになってたんだよ」

「えー？！ぼく、やだよ。ミスコンなんて」

「でももう決まりだな。ほかのやつらも、さっさと面倒はすませたいのさ」

あっという間にホームルームは終了して、各自解散となっていた。

中間テストが近いので、ほとんどが帰宅の準備をしている。

ざわざわと人の声と足音が混ざる教室で、和尚だけは身動きもせず、じっとぼくを見ていた。

彼の視線ビームはX線仕様で、人がびっくりするほどの確に、物事の骨格をとらえることが出来た。

「なにを悩んでる？」と和尚が口を開いた。

「ぼくが？いつものことだよ。それでも、青春の1ページを読んだる男のコなんだから」

「2ページ目をめくってみると、そこになにかが書いてあったというわけか」

ぼくは、和尚をちらつと見た。

それが和尚、おまえへのライバル意識だなんて、ぼくに言えるわけないだろう。

「和尚。それより、ミスコンだぜ？あらゆる美女が集まってくる。

おまえにどれかいいのを、ぼくがあてがってやるよ」

「おれはいいよ。自分で選ぶ」

「ほう」

「もしかしたら、優勝した子に無条件でアプローチかけるかも知れない」

「えっ？！恋愛感情なしで??」

「もちろん、なしで」

「おまえらしくないな、和尚」

「じつにおれらしいと思うけどな」

和尚は、淡々とした口調で語った。

「おれはね、おまえみたいにこころの暖かい人間じゃないんだ」

「信じられないな」

「おまえのことが、ときどき羨ましいよ」

「なら、そんな変な告白するなよ」

和尚はそのとき、自分を少し哀れむかのように言った。

「おれもね、年相応の経験値は積んでおきたいの。ほんとうの恋愛をしたときのためにね」

ほんとうの恋愛。その予感のする相手は、和尚、おまえにとって誰なんだ？

ぼくは、海へ行ったときの、和尚の奇妙なはしゃぎぶりを思い出した。あれ以来、彼のあんな姿はまだ見ていない。

ぼくは、ぼくなりのレーザービームを、和尚に向けて発射した。

「このまえの愛子ちゃんって、どうなのよ。和尚、やたらと気が合ってたじゃん」

「ああ。あいつか。面白いな、彼女」

「彼女にはアプローチしないの？」

「するわけないだろ。あいつ、こころは男だよ」
「なに」

「夏休みは男連中とツーリングだったさ。彼女が欲しいのは男友だちだよ。ぼくはその一人に認定された」

「そうなのか…」

少なからず、ぼくは落胆した。

愛子は、和尚の恋愛対象になり得なかったのだ。

第6話（文化祭）

やがて9月がきて、文化祭の季節を迎えた。

結花は、この頃、やたらそわそわしていた。長く伸びた髪を綺麗にそろえて、目元と唇に少し化粧もするようになった。

「周りの友だちが、こうした方がいいって言うのよ」と結花は説明した。

ぼくは、どんどん艶やかに変わっていく結花を見て、とまどっていた。

ぼくは、こんなに素晴らしく美貌な女の子と付き合ってきた自分を、いまさらのように奇跡に感じた。

「ミスコンテストの人数が足りないんだ」

と、文化委員から告げられたのは、文化祭直前のことだった。

「案外、エントリー者が少なくてな。他校からも応募を受け付けることにした」

「それで、ぼくにどうしろっての？」

ぼくは、文化委員の男に尋ねた。

「誰か綺麗な女の子、探してきてくれないか。おまえ、女子高の彼女がいるんだろ？」

「べつにそんなに無理しなくても。たかが、文化祭だろ」

「ところがちよつと、違うんだ」

文化委員は熱心に言った。

「じつは、おれの兄貴が雑誌社に勤めててさ。こんど、ミスコン覇者の特集を組むらしいんだ。…うまくいったら、グラビアアイドルへの道だぜ？」

「そんなのぼくらに関係ないじゃん」

「大ありだよ！だって、もしうちの学校からアイドルが出たらどうする？おれら、アイドルとお友だちだぜ?!」

アイドルタレント好きな文化委員は、野望を抱いていた。ぼくは、あきらめて、結花に電話して、適当な子を選んで連れてきてくれな
いかと頼んだ。

そして、結局、選ばれてきたのが結花だった。

「なにがなんだかわかんないの。とにかく、みんなが出るって言う
から」

ぼくは、あたまを抱えた。これでは、ぼくの大切な宝を、みんな
の目前に防犯装置もなしにさらけ出すようなものじゃないか。

「いまからでも、変更きかないの？」

「駄目みたい。それに…、わたしなんだか興味あるし」

結花から、そんな言葉が出るのは驚きだった。彼女は、こんなに
積極的な女の子だっただろうか。

なんだか、ぼくはだんだん、彼女のことを、知らない女の子を見
ているような気分がしてきた。

文化祭当日のその時間、ぼくはほとんどやけっぱちになっていた。

「24番、桜井結花さん」とアナウンスが流れる。

「ほおー……」

…グラウンドから、大きなため息が洩れた。結花の水着姿だ。

夏の海でも見たはずだったが、彼女は、いちだんとメリハリのあ
る女らしい体型になっていた。

なんと、少女が大人の女性になるスピードは速いのだろう。

太陽のもとで健康的に焼けた肌が、結花の白い歯と輝く目をさら
に引き立てていた。

ぼくは、結花が多くの人のまえで笑顔をつくっているのを、とて
もじゃないが落ち着いて見ていられなかった。

「おい、和尚…」

ぼくは、隣で見ていた和尚に、D組のソバでも食いにいくつぜ、と声をかけようとした。

だが、和尚は、そんなぼくの方を見向きもしなかった。

彼は、ただじっと、壇上の結花を見つめて立ちつくしていた。

ぼくは、そんなに無防備な、なにかにとりつかれたような和尚を見るのは、初めてだった。

第7話（ぼくの謀略）

やがて、季節は冬に突入した。

文化祭で開催されたミスコンテストには、見事、結花がグランプリに選ばれた。

ぼくは、グランプリの恋人ということで、周りからずいぶん冷やかされたり、羨ましがられたり、妬まれたりした。

しかも、結花は文化委員が言ったとおり、雑誌社から取材の申し込みが入り、グラビアアイドルの仕事をしてみないかという正式なスカウトを受けていた。しかしそれには、結花の両親が難色を示し、一時保留となっていた。

「アイドルになりたい？」とある日、ぼくは結花に聞いてみた。

「そうだなあ。憧れもあるけど…。でも、ああいうお仕事始めたら、恋愛出来ないんでしょ？」

「かも知れないね」

「わたし、そんなの嫌だし」

結花は、ぼくににっこりと笑いかけた。

でも、その言葉とその笑みは、ほんとうにぼくに向けられて発信されているのだろうか？

ぼくはこの頃、結花に対して、素直に向き合えずにいる自分に気がついていた。

和尚は和尚で、こころここにあらずといった感じだった。

「おまえ、最近、冷たくないか？」

ぼくは、教室の古い電気ストーブで手を温めながら言った。

「そうか？ 悪いな」

和尚は、机の上に何冊かの分厚い本をひろげて、熱心になにか英語を書いていた。

「悪くはないけど。なんかぼくに隠し事してない？」

「してるよ」と和尚はあっさり言った。

「なに？聞き捨てならないな」

「進路のこと」

「え？？」

「もう1年も終わりだからな。来年からは本格的に勉強しないと」

「……っておい。おまえ、東大行くんじゃないの？」

「行かない」

「なに？」

「ハーバードにしようかと思ってる」

「はあああ？？」

「世界で最高のランクだと思う」

そのあと、付け足しのように、「おれの母親の母校でもあるんだよ」と和尚は言った。

「さあ、これで隠し事はないよ」

ぼくの呆気に取りられた表情をよそに、和尚は本の山々を片づけ始めた。

「かえろっか。ラーメンでも食う？」

（こいつは、自分の気持ちを隠し通す気だ）とぼくは思った。

だが、それは和尚の試合放棄のサインでもあった。

和尚がアメリカに進学するとすれば、たとえ二人が惹かれあっても、いずれすぐに離ればなれになる。

彼の性格からみて、ぼくは彼が、そんな実りのない恋を育てるとは考えられなかった。

おそらく、一時的に結花に気を取られたとしても、すぐに体勢を立て直して、何食わぬ顔で学年トップを歩き、ひたすら前を目指していく。実際彼は、そんな男だった。

だから、ぼくは、いま、結花と和尚のあいだに芽生えかけている恋を、どうしても摘み取らなければならなかった。

「おい、いつかの話だけど」

ぼくは和尚に交渉を持ちかけた。

「なんだ？」

豚骨ラーメンの熱いのをずるずるいわせながら、和尚が生返事した。

「おまえんち、ぼくと結花とのデートのとき使わせてくれるって話、あつたじゃない。あれ、まだ有効？」

「ああ。やっとその気になったか。いつだ？」

「まだわからないけど、近いうち」

「いいよ」

和尚はよどみなく言つて、自分の離れのカギをくれた。

「マスターキー持つてるから。落とすなよ」

あまりのあっけなさに、ぼくは拍子抜けした。

ぼくは、この際、一気に結花を自分のものにしようと決心していた。問題は、結花をどう呼び出すかだった。

考えたあげく、ぼくは、和尚と一緒に3人で試験勉強しようという話を、彼女に持ちかけた。

「あいつ、なんでも教えてくれるぜ。あたま無茶苦茶いいから」

「…そうなの？和尚の勉強の邪魔にならないかな」

「いいの。ミスグランプリには、誰にでも無条件で勉強教えますつて、学級委員に誓わされてたんだから」

大嘘もいいところだった。だが、結花はそれで納得した様子だった。ぼくは、和尚にすまん、ところのなかで手を合わせた。

決行日は、からりと晴れた暖かい冬の日だった。

でもぼくは、冬のプールから上がってきたばかりの間抜けな犬みたいにブルブル震えて、ものすごく緊張していた。

「え？和尚、いないの？」

結花は、部屋の座布団の上に座ったまま、愕然としていた。

「うん。なんか急用で、外に出たらしい。帰ってくるの、夕方になるから勝手にしてくれってさ」

ぼくは、ケータイをぱちんと閉じた。すべて、予定通りだ。

「そんなあ。じゃあ、来た意味ないじゃない」

「そんなこと言わないでよ。ぼくだって、きみを教えることくらい出来ますよ」

「でも。和尚が教えてくれるからって来たのに」

「二人で一緒に勉強するのもいいんじゃない？」

「…なんだか変。翔ちゃん、和尚になにか言ったの？」

結花の顔つきが、急に険しくなった。

「なにも言うわけないでしょ」

「じゃ、どうして？和尚は、約束を破ったりする人じゃないと思う」

「ちょっと」

結花のあまりのしつこさに、ぼくは少し腹が立ってきた。

「きみの彼氏は、誰なの？」

「…え？…」

「ぼくのはずじゃ、なかったの？」

「どうして？翔ちゃん…そんなこと」

「結花、きみね。最近、ぼくのこと避けてるでしょ」

「そんなことないよ…、」

「じゃなんで？手を握るのもキスするのも駄目なの??」

「翔ちゃん、優しくない」

「ぼくだってね、男なのよ？」

ぼくは、結花に強引に口づけた。

結花が、こわい、と泣き始めた。その美しい大きな瞳をにじませる。

でも、この艶やかな彼女をつくったのは、ぼくじゃないんだ。

「和尚！」

結花の声を聞いたとき、ぼくははっと息を止めた。そして、彼女の身体から離れた。

結花は、ずっと泣いていた。

ぼくは…、敗北感でいっぱいだった。

「和尚はね…。ほんとは、ミスグランプリの女の子なら、誰とでも付き合うって言った男だよ」

「……………」

「それからね。そのうちアメリカへ行っちゃう男だよ」

「……………っえっ？」

ぼくがそれだけ言って、離れの部屋を出ると、門のあたりで、和尚がぼつの悪そうな顔をして立っていた。

ぼくは、下を向いて、彼のそばを無言で通り過ぎた。

やつに、ぬかりはない。ちゃんと、結花が傷つかないように見張っていたのだ。

第8話（和尚と結花の恋・1）

その後、和尚と結花が、どうやって結びついていったかは知らない。

おそらく、あの出来事のあと、おずおずと和尚が離れの部屋へ行って、結花の様子をうかがう。結花は和尚に泣きながら抱きつ

く。和尚は結花を抱いて優しくなぐさめる。1カップルの出来上がり。

まあ、こんなところだろうと、ぼくは勝手な想像し、自分の愚弄さに吐き気がしていた。

2年生になって、和尚とはクラスが別々になった。

ぼくは、登下校の電車の中や駅の周辺で、二人が仲よく歩いているのをたまに見かけた。

背の高い白人顔の秀才・和尚と、グラビアアイドルばりの美少女・結花は、誰の目も引くゴールデンカップルだった。

和尚とは廊下ですれ違ったときに、目でよつと合図する程度の距離感だった。

和尚はぼくになにか言いたげな目をしていたが、ぼくは彼とは、とりあえずいまは話したくなかった。いつも連れ添っていた親友が、急にいなくなるのは、それは寂しかった。

だが、和尚もやがて一人に飽きたのか、バスケット部に混ざってバスケットをしている彼の姿を見かけるようになった。

そうしたら、たちまちレギュラーになって、弱小チームを県大会まで導いたというから驚きだ。

あいつは、ほんとうに、なんでも出来るバケモノだった。

ぼくが将来旅客機のパイロットをしているとすれば、和尚はNASAで宇宙飛行士をしているんじゃないかというくらいの差はあった。

夏休みが始まるつかという7月のある日、ぼくは、クラスの仲間と放課後騒いでいて、少し帰りが遅くなったことがあった。

夕日が落ちて、暗闇が迫ろうとしている夜のターミナル駅の近くで、ぼくは大型書店から出てきたところを、ばったりと愛子と鉢合わせた。

「あれえ？翔ちゃん？ひさしぶりー」

愛子は、少し呂律がまわっていないかった。

「愛子？？もしかして、酒飲んでるの？」

「そーよ。ヤケ酒。バイク仲間の彼氏にふられちゃったー」

「愛子って、酒飲んだりするんだ？」

「家で飲んできたんだから、かまわないじゃない？ちよっと、口直しにドーナツでも食べようよ」

そう言う愛子に連れられて、ぼくは彼女と駅前のドーナツ屋に入るようになった。

「結花と別れてから、どうしてんの？」

愛子は、少し酔っているせいか、いきなりズバツとぼくの核心を突いてきた。

「べつに、ふつうの高校生活を送ってるよ。バケモノの和尚と一緒にいたときより、ずっとふつうな感じだな」

「ふーん。和尚って、そんなにバケモノなんだ」

「なにしろ、志望大学がハーバードだからね」

「それもそうねー。あ。それで結花の方はねー」

ぼくは結花、のなまえにドキツとした。

愛子は、グレープフルーツジュースの氷をからんといわせて、美味しそうにそれを飲んだ。

「幸せだって言ってるけど、寂しそう。和尚、結花との交際は高校までって宣言してるらしいよ」

「えええー！？それは、冷たい話だな…」

「でしよー？わたしもそう思う。あと1年半しかないなんて」

ぼくは、結花のことが心配でたまらなかった。和尚に、彼女を託したことは、正解だったんだろうか…。

「まっ。そのときは、翔ちゃんがまた結花を支えてやればいいじゃん。結花、号泣すると思うけど、頼んだよ」

「そんなことを言われても…」

「翔ちゃん、まだ結花のこと好きでしょ？」

ぼくは、コーヒーを飲んで黙秘した。

「和尚と仲直りできてないもんね。まあ、すぐには無理だよ」

愛子は、勝手に話を決めつけて、あとは別れた彼氏の悪口大会をした。

ぼくは、苦笑いで彼女の話を聞いてやりながらも、あたまは結花のことでいっぱいだった。

「いつか、ぼくの手に結花が戻ってくることがあるんだろうか…」

愛子との別れ際、ぼくらはハイタッチをした。

「えへへー。失恋組同士、仲よくってことでこれからもよろしくね！」

ぼくは酔っ払いの愛子に手を振って、それから一人歩道橋を渡っていった。

すっかり暗闇になってしまった空を見上げながら歩くと、チカチカ光る飛行機がゆっくり横切っていくのが見えた。

ぼくは、パイロットになる夢は捨てていなかった。それにはまず、大学だ。

和尚、ぼくだって、いつまでも負けてやしない。結花になにかあれば、ぼくが許さない。

ぼくは、自分が一人の男として、強くなっていくことを決意した。

第9話（和尚と結花の恋・2）

夏休みに入ると、ぼくは予備校通いを始めた。夏休み限定の短期コースだ。

「他校のやつらと勝負するのは、いい刺激になるな」

ぼくは、学校で同じクラスの矢野に言った。

「そうだな。でもさすがに、おれらの高校の《土星人》レベルのやつはいないな」

その頃、和尚は、新しいクラスのなかで《土星人》と呼ばれていた。勉強からスポーツまで、すべて人間離れしているという意味だ。

「あれはバケモノだから、ほっとけばいい」

「土星人、予備校通いしないのかなー」

「家庭教師がついてるって噂だけど」

「だろうな。日本の大学とは試験内容が違うもんな」

「まあ、遊んでる暇はどっちにしろ、ないだろ」

そんなことを言いながらも、ぼくと矢野は授業のあとで、ちよつと祭りをのぞいていこうぜと、にぎやかな太鼓の音がする小さな寺の境内の方へ歩いていった。

たくさん屋根のなかで、浴衣姿の女の子たちがはしゃいでいるのが目にとまる。

「いいよなー」と言いながら、男二人のぼくらは、勉強疲れのあたまをさわやかな女の子の浴衣姿で癒していた。

突然、花火がパンと上がる。わあっと、人々が声を上げる。

ぼくは、ぼんやり花火の連発を見ていた。

そのとき、ぼくはふと、花火は綺麗だけれど、すぐに消え落ちてしまう、なにかはかないものだと思った。

「おい、あれ、土星人じゃないか？」と突然、矢野がぼくにささ

やいた。

「え？」

見ると、ぼくらの右手の少し向こうに、浴衣姿の和尚と結花が並んでいた。

パンと火花が上がると、手前に立つ結花の顔が明るく染まる。

その横顔が、あまりに美しくはかなげで、ぼくは思わず息をのんだ。

和尚はそのかたわらで、うつろな表情で閃光を見ている。

ぼくは、彼ら二人が見ているものは、ほんとうに火花なのか？という考えが頭に浮かんた。

もしかしたら、彼らが見ているものは、自分たちの未来じゃないだろうか？

彼らは、かげろふの命のように短く、終わりの近い恋を生きている。

「あいつ、余裕だなー」と矢野が和尚のことをびっくりして言った。

「海王星人だからな」とぼくは適当に相槌を打った。

「そっか。すでに土星の距離じゃないな」

矢野は、へんに理解して、じゃ帰るか？とぼくにうながした。

ぼくは、人ごみにまぎれながら、彼らを振り返りつつその場を離れていった。

でもいま、ぼくが彼らに出来ることは、なにもなかった。

夏休みの終わりごろ、愛子がフィットネスクラブの割引チケットを持ってきた。

「ぼく、勉強で忙しいんだけどな。これでも」

「なに言ってるの」と愛子は一喝した。

「カラダ、鍛えなきゃ。パイロットなんかになれないぞー」

それもそうだった。

和尚がバスケに打ち込んだりしているのも、ハーバード大学では勉強だけが出来ても合格出来ないところにあるんじゃないかと、ぼくは思っていた。

「よつす！」

フィットネススクラブのプールに現れた愛子は、もうすっかり失恋から立ち直っていたので、ぼくはびっくりした。

「愛子、元気だなあ。安心したよ」

「ふふふ」

愛子は自信満々の笑みを浮かべながら言った。

「わたしは将来、新聞記者になるの。小さなことでは、へこたれないわよ」

ぼくは愛子につきあつて、25mプールを100回くらいターンさせられた。

「あはは、このくらい余裕よ！」

「でも、ぼくはちょっと休みたいよ。デッキチエアの方に行かない？」

「仕方ないな。じゃ、上がりますかっ」

ぼくらは、ざぶつと水から上がって、プールサイドのデッキチエア2つを占領した。

ぼくと愛子のこんな明るい関係からすれば、和尚と結花のゆらぐ切ない感じはなんなのだろう。

ぼくはふと、人と人とが永くつきあうには、恋人同士にならないことがいちばんなんじゃないかなと思った。

そのことを愛子に話すと、愛子もそうかもね、と相槌を打ちつつ、でも結婚するって手もあるよ、とつけ加えた。

「和尚と結花だって、恋人同士でなきゃ辛い思いをしなくてすむのにね」

「結花、やっぱり辛いのか？」

「そりや楽ではないよね」

「やつぱりか…」

ぼくの胸が、ちくんと痛んだ。

「正直言つてね、わたしは結花には翔ちゃんの方が合ってると思う。和尚と結花の恋には未来がないよ」

「それでも、燃え尽きたい恋つてあるんだろうな…」

ぼくは花火を思い出して言った。

「じつくり、時間をかけてわかりあえる恋つていうのもあるんじゃない？」

「そういうの、ぼくらの歳じゃまだ早いような気がする」

「かも知れないけど。そのうち、翔ちゃんと結花にもそういう時期が来るかも知れないから、こころの準備しておくことね」

「なんだか、意味深な言葉だな」

「深く考えない。運命は、待っているときを要求することもあるのよ」

ざぶんと愛子がまた水のなかに入ってしまった。

あいつ、哲学者だなと感心するとともに、「こころは男だよ」とまえに和尚が愛子のことを指して言った言葉を、ぼくは思い出していた。

第10話（結花の妊娠）

それは、突然のメールから始まった。

夏休みが終わり、秋が深まって涼しい風がそよぎ始めたころ、

「翔ちゃん、会って話がしたいの」と、結花からの連絡がやって来たのだ。

ぼくは腰がぬけるかと思うくらい、びっくりした。いったい、なにが起こったんだ？！

指定された駅前のドーナツ屋　愛子とおしゃべりした場所だ
に行くと、久しぶりに見る結花は、肩を落として、しおれた花のようになっていた。

ぼくは、なにが始まるのかとドキドキしながら、「久しぶりだね」と声をかけて、結花のまえに座った。

「愛子から、もう聞いている？」

結花はぼくが座ってから、やっと重そうな口を開いた。

「え。なにを？」

「わたしが、妊娠したこと」

「えっ……！」

ぼくは、これまでにないくらいの驚きで、身動き出来なくなった。
妊娠、妊娠って……？！和尚の子だよな？

あいつ、なんてことしたんだよ？！

ぼくは、混乱して、言葉が出なかった。

「翔ちゃんにとっては、こんな話、迷惑なだけだと思うけど」

ぼくは、そんなことはない、というふうに関心な目をして首を小さく振った。

「わたしは産みたいの。でも、和尚が駄目だって」

「……結花……」

「あの人には、大きな夢があるから」

「うん……」

「あの人の未来に、わたしはいない」

結花は、急に、苦しそうに顔をゆがめて涙をポタポタとこぼした。ぼくは急いで、テーブルの上の紙ナプキンを引き抜いて、彼女に渡した。

彼女は、紙ナプキンを使いながら言った。

「…たぶん、彼にとつては」

結花の声は、嗚咽を殺してのとぎれとぎれだった。

「わたしは…、ただの通りすがりの女の子」

「そんなこと、ないよ！」

ぼくは、和尚の、初めて結花に目覚めたときの彼らしくない無防備な表情、そして、ぼくへの気づかいから勉強に打ち込んで彼女を忘れようとしていたことなんかを思い起こして、強く言った。

「和尚は、真剣に、結花のことを愛してるよ」

「うん…、ありがと。翔ちゃん」

結花は、紙ナプキンを使いながら、真っ赤な目でぼくを見た。

「やっぱり、翔ちゃんは優しい」

「ぼくは優しくなんかないけど、」

ぼくは、彼女をなぐさめようと必死だった。結花の泣き顔を見ていると、ぼくも涙が出てきそうだった。

「いつだって、結花のことを応援してるから。ぼくはいつでも、結花のところに駆けつけるから」

「…うん。ありがと……ほんとうに。頼りにしてる」

やがて結花は、泣き顔をおさめると、ぼくに「また連絡してもいい？」と尋ねてきた。

ぼくは、もちろんOKだった。

結花とドーナツ屋で別れたあと、ぼくは、今度は和尚への腹立ちでいきりたっていた。

あいつを、思い切り一発殴ってやらないと、もう絶対に気がすまない。

歩道橋を歩きながら、ぼくはあいつに電話した。

「和尚。話がある」

和尚は、ぼくの怒りにふるえる声をものともせず、いつもの簡潔な口調で言った。

「いまから家庭教師が来るんだ。明日にしてくれないか」

ぼくは、和尚の冷静さが許しがたくて、通行人が振り向くほど声を荒げて言った。

「ばかやろう！なにが家庭教師だ！！おまえ、そんなことやってる場合じゃないだろ！！」

「翔らしくないな。そんなに興奮して、話ができるのか？」

和尚は、淡々とぼくを受け流した。

「ぼくは、ふつうの男だからな！！」

ぼくの目から、涙が出てきた。

「ぼくがおまえなら、結花をもっと大切にす！いつも、彼女のそばにいてやる！ずっとずっと、離れたりなんかしない！！」

和尚はずっと黙っていた。

「おまえに結花をやるんじゃないよ！！」

「まで。翔」

そこで、プツンと電話が切れた。

ぼくは、自分のケータイの電源が切れていることに気がついた。

…その夜、ぼくは眠れなかった。

結花のこころの痛みが、ぼくのこころに伝染していた。

結花…。それでも、和尚が好きなのか。あんな、冷たいやつでも。

第11話（和尚の決断）

翌日、ぼくは、1時間目が始まるうというときに、廊下で和尚にばったり出会ってしまった。

「やめろ!!」

気がついたら、ぼくは和尚に馬乗りになっていて、周りのやつらに腕をつかまれていた。

和尚は、口の端から血を流していた。

やがてぼくらはざわめきとともに引き離され、お互いを見ることがもなく授業の教室に入った。

「おまえら、どうしたんだよ？仲よかったんじゃないのか」

矢野がこそそと横から詮索してきた。

「誰だっけ、あのミスグラプリのせいなのか？でも、なんでいまさらなんだ？」

「ほっといてくれ。この件だけは」

矢野は、ふうとため息をついて、授業に入ってしまった。

ぼくは、和尚がなんの抵抗もしなかったことが、少し気がかりになっっていた。

その日の放課後、ぼくは図書室で数式に手間取って、夕暮れどきまで学校にいた。

そして、ようやく帰ろうと、和尚のいるB組の教室を通りかけたときだった。

開いたドアから何気なく中を見ると、そこにただ一人、和尚がぽつんと後ろ向きで座っていたので、ぼくはびっくりしてしまった。

和尚の大きな背中、薄暗い教室のなかで、丸く小さくなっている。ここまで落胆の色をにじませた彼を見るのは、ぼくは初めてだ。

った。

和尚は、こんな時間に誰かがここを通り過ぎるとは、予測していなかったに違いない。彼の傍らには、二つに引き裂かれたなにかの紙があった。ぼくは、なんだろうと思って、少し角度を変えて様子を見た。

驚いたことに和尚は泣いていた。

あまりにびつくりして、ぼくは思わず、「おい和尚…、」と声をかけかけた。

するとそのとき、和尚が「…うん」と声をあげた。彼は、誰かと電話で話をしていたのだ。

「結花とおれの子ども…欲しかった」

その言葉に、ぼくは一瞬息が止まった。

和尚は、自分の野心のためなら、すぐさま障害物を取り除くような男じゃなかったのか。

「ああ。結花がそう言ってるならそれで」

和尚は、ぼくがいることも気づかず、電話で話を続けていた。そして電話を終えると、上を向き、しばらく呆然としていた。

そのあと、ふと気がついたように、引き裂いた紙を丸めて、ポンとバスケのシュートのようにごみ箱へ投げ入れた。

ぼくは、そろそろ、ぼくの出番だろうと考えた。

「和尚。なにやってんの」

和尚は、首を回して、ぼくをぼんやりと見た。

「ああ…、昨日は悪かったな。話が出来なくて」

「そんなことじゃないよ。結花から話を聞いたよ」

「…ああ。わかってる」

「これからどうするんだ？おまえら」

「結花がもう、おれに会いたくないって言ってる」

「えっ？」

「お別れだよ。いずれこうなることはわかってた。遅かれ早かれ」

「じゃあ、子どもは…」

「愛子が結花と一緒に、病院に行くってさ」

「…それでいいのか、和尚？」

和尚は、いまにも泣きそうなまなざしで、ぼくを見た。

「おれは、おまえみたいにこころの暖かい人間じゃない。自分のエゴだけで生きている男なんだ」

「そんなことはないだろ、和尚？」

「いや。そのものだ。おれは、いずれいなくなるのをわかってて、結花に近づいた」

「和尚。あれは、結花の決断だったよ」

「何度もおまえに謝ろうとした。けど出来なかった。すまん、翔」

「それより、結花をなんとかしてやれないのか」

「勝手な話だけど、彼女には、おれよりもふさわしい男がここにいると思う」

「待てよ、おまえ、それでいいのか？」

「おれは、もう一度、自分自身について考え直してみるよ」

「逃げるのか、和尚」

「そうだ」

そう言っ、和尚は荷物をまとめて、黙って教室を出て行った。

「おい、逃げるなよ。和尚。ぼくらは」

和尚が廊下で肩の向こうから、ぼくを見た。

「友だちだろ？いつかまた、一緒に笑えるよな？」

和尚は、口元をぐつと噛みしめて、ぼくを睨んだ。

「たぶん」

そして、廊下を曲がって消えていった。

ぼくは、自分に課せられた役割の大きさに、ただ呆然とするばかりだった。

そして、ふと気がついて、教室のごみ箱の中身をのぞいてみた。

ごみ箱の中からは、子どもと大人の切り絵が、バラバラと夢のあ

とのように出てきた。

第12話（遊園地）

ぼくは、ごみ箱から回収した切り絵を、セロテープでとめて自分の部屋に保管しておいた。

なんとなく、それが彼らの亡くなった子どもへの供養になるような気がしたからだ。

「遊園地に行こうよ。3人で」

愛子から電話があったのは、春休みに突入してすぐのことだった。「結花もこの頃パツとしないしさ。翔ちゃんも勉強ばかりしてないで、行こう行こう」

ぼくは、3人で、というところに、なにか愛子の策略めいたものを感じた。だが、ぼくには天からの配剤を拒否する気はまったくなかった。

「翔ちゃん。こっち！」

駅前に着くと、愛子の明るい笑顔と、結花のおだやかな笑顔があった。

結花はぼくと秋にドーナツ屋で会ってから、何回かメールをくれていたが、会ったのはそれ以来だった。

「なにに乗る？」

愛子は、どうやら絶叫マシンを乗り回す気にいるようだった。

「んー。ぼく、こういうの苦手なのね」

「結花は？」

「わたしもちょっと…」

「わかった。じゃ、一人で行ってくる！」

愛子は行列のなかに突っ込んでいった。あの様子じゃ、40分は待つことになるだろう。

「やってくれるな、あいつ」とぼくはつい、つぶやいてしまった。

「なにが？」と優しく結花が尋ねてくる。

「いや。それよりぼくらも、なにかべつの乗り物に行こうよ」

遊園地というものは、だいたい奇数人数で行くべきではないのだ。なにを乗るにしても、二人と一人の組み合わせになる。愛子は、このことも考慮してくれたと思われた。

ぼくは愛子に感謝して、結花と二人でコーヒーカップのなかに座って、くるくると踊った。

結花は、ストレートの長い髪をなびかせて、楽しそうにあたりを見回していた。

「ねえ。結花」

「うん？」

「だいぶ、元気出てきたみたいだね」

「うん。これも、翔ちゃんの励ましのおかげ」

「ぼく、ほんとに嬉しいのよ。結花の笑った顔が見れて」

「ふふふ。翔ちゃんが、へんな顔の写メくれたりするから、わたし、それ思い出して毎日笑ってたのよ」

「受けた？」

「受けた受けた。学校の友だちにも見せてまわっちゃった」

「あー！あれは結花限定だったのに」

「それならそうと、書いておいてくれないと」

結花はくすくす笑いながら、コーヒーカップから軽やかな足取りで降りた。

「ああ、なんだか気持ちが吹っ切れた感じ」

ぼくは、結花のころのなから、和尚がどれだけ消えたのだろうと考えた。最高値を100%とすれば、いまは80%くらいか？ぼくは、いまがチャンスだと正直思った。

「ねえ、結花。そのベンチでアイスクリームでも食べない？」

「そうね」

まだ肌寒い季節なのに、ぼくらはアイスクリームを二人でなめた。ぼくのアイスはペパーミントチョコで、結花のは甘いストロベリー

ジャムだった。

ぼくらは、しばらく黙ったまま、ベンチで行きかう人を眺めていた。

そのときぼくは、結花はぼくの言葉を待っている、と思った。

「ねえ、結花。ぼくらまた、やり直し出来ないかな？」

ぼくは勇気をふりしぼって、言った。

「え」

「まえみたいに付き合えないかなってこと」

「翔ちゃん……」

「ぼく、結花のことがまだ好きだから」

「でも翔ちゃんは、こんなわたしでいいの？」

「ぼくには結花しかいないと思ってる」

「翔ちゃん……」

結花は、少し考えてから、ぼくの方を見てゆっくりと言った。

「わたしも。優しい人がやっぱり好き」

ふんわりと、ぼくらの横で風船が一つ、飛び上がっていった。

「……ありがと。ぼくは全力できみをお守りしましょう」

観覧車で、ぼくが結花の手を引いて二人で乗ると、愛子がそのあとから乗り込んできて、満足げな笑みを浮べた。

「いい夕日ね」

愛子はニコニコしながら、暮れゆくレジャーパークの風景を背景に、ぼくら二人に言った。

ぼくは、愛子をじっと見て、結花にわからないように小さく親指を立てた。

愛子は、ますますにつこりした。

結花とぼくの二人は、その後、並んで外をゆっくり見た。

ぼくはそっと、結花の手を握った。

第13話（ぼくと結花の第2章）

遊園地でこころを合わせてから、結花とぼくは、お互いの家を行き来するようになった。

結花の母親は、ぼくに「いつも勉強を教えてくださいださってありがとう」と感謝してくれていた。

「いいのかな。あんなに感謝されて」

「だって、ほんとうにやってることは勉強なんだもん」

「たまにはこういうこともするけどね」

ぼくは、机を乗り出して、彼女に軽くキスをした。

まえに付き合っていたときから、ときどきしていた儀式のようなキスだった。

結花は、くすくす笑った。

「ちょっと。なんで笑うの？」

「だって、翔ちゃんのキスって優しすぎるんだもん」

「じゃあ、どいうのがいいのよ」

ぼくは憤然として言った。

「そうね……」

結花はじつとぼくを見ていた。

ぼくが、その大人びた表情にドキツとしていると、結花は、立ち上がってぼくの横にちょこんと座った。

そして、ぼくの唇に自分の唇をつけると、ぼくの中に舌をそっと入れてきた。

ぼくはただ彼女に身をまかせていた。

「……すげえ……甘い」

唇を離れたあとで、ぼくは魔法にかけられたみたいに固まっていた。

「ふふふ。ケーキのせいかな？」

「いや、そんなんじゃない」

ぼくはそれを確かめるために、結花をぼくの方へ引き寄せて、もう一度彼女に口づけた。

今度は、ぼくが彼女のなかに入る番だった。

そうしているうちに、ぼくはだんだん、自分のなかが抑えきれなくなってきた。

「いいの？ぼくをそんなに挑発しちゃって」

「挑発してる？」

「まえにも言っただけど、ぼくも男なのよ？」

「あのときは、まだわたしも子どもだったから。…傷つけちゃってごめんね」

誰に大人にされたんだよ、とぼくは一人の男を思い出して、猛烈な嫉妬心が湧いてきた。

「結花をぼくのものにしたい」

「…うん」

「結花は、それでいいの？」

「翔ちゃん。わたしは翔ちゃんの優しいところが好きだけど」

結花はちよつと言いくそうに目をそらした。

「たまには、強いところも見せてほしいなって…思う」

ぼくは、急に緊張して、ドキドキと心臓を波打たせた。

結花を抱きしめて、ぼくのものにしたい！それは、ぼくのなかに確実にある欲求だった。そして、何度も自分のなかで夢想してきたシーンでもあった。

結花は、じつとぼくを待っていた。

ぼくは決心して、彼女を優しく押し倒した。

それからあとは、無我夢中だった。

「…家の人に気づかれないかな」

「今日、誰もいないよ」

結花の言葉に力づけられて、ぼくは彼女を強く抱きしめる。

結花は、柔らかくぼくを迎え入れてくれた。
夕暮れどきの西日が、ぼくらを優しく包む。

そうして、ぼくは結花を愛する一人の男になった。

第14話（進路）

春休みが終わり、3年になると、ぼくと和尚はまた同じクラスになっちゃった。

そして、1年のときと同じように、ぼくらはまた出席番号の最後の2人となった。

最初に決められた席が前後なので、ぼくらは無視し合うわけにもいかなかった。

「和尚。おまえ、理系なの？」

ぼくが選んだこのクラスは、ほとんどが男子の理系だった。

「おれは、むしろ多様なことが出来た方がいいんだよ。文系も理系もない」

アメリカの大学は、文系だの理系だのどっちかが出来ればいい、そして勉強だけが出来ればいいというものではないらしい。

そういうわけで、和尚は大学で経済学を学ぼうとしていたが、理系クラスにいて、バスケだの障害者ボランティアだのにも興じていた。

「冥王星人と仲直りしたのか。よかったな」と矢野が休み時間に、ぼくに話しかけてきた。

「それを言うなら、海王星人だろ」

「そっか。冥王星は惑星から外されたんだった」

矢野は、へんに理解して、うなずいた。

「仲直りっていうか…、あいつ、これでいいのかな」

「ん？どういうこと？」

「じつは、ミスグランプリが帰ってきたのよ。ぼくのところへ」

「ええー！あの海王星人をふる女がいるのか！」

矢野のレスポンスはいつもの外れたった。

「ぼくが、彼女をやつにとられたときは、ショックで話す気にもな

れなかったけど」

「うん」

「和尚は平然と話しかけてくる。あいつ、ほんとに海王星人なんじゃないかな」

もし、ぼくに対する和尚の態度が忍耐によるものならば、それは相当強靱な精神力が必要だと思われた。

「翔ちゃん、普通の国立大学へ行くんだ？」

桜の花びらをあたまにひとひら乗せた結花が、ブランコに乗ったまま言った。

桜が満開になって散り始めると、ぼくと結花は近所の公園へ行った。

中学生のころから、二人が遊んでいた小さな公園。結花が、ジーゾの後ろを汚しながらすべっていたすべり台は、もうぼくらには無縁になっていた。

「うん。パイロットになるには、大学で2年間基礎学問をやって、それから航空大学校に編入するのが早道だからね」

「ふうん…。パイロットになるって、本気だったのね」

「なんだか、子どもの夢みたいに思われるけど、ぼくは初めからそのつもりだったよ」

ぼくは、結花に微笑みかけた。

「それで、結花は？」

「え？」

「結花は、進路どうするの？」

結花は、ちよつとうるたえた様子を見せた。

「進路…っていつても、具体的になんにも考えてないのよね。…どうしようかなあ」

「グラビアアイドルになるとか？」

「さあ。なんか、雑誌社の人は熱心に勧めてくれてるみたいけど」

「はやくしないと、年をとるぞ」

「ひどい」

結花は笑顔で言ったが、こころはなにかに奪われているみたいだった。

彼女の瞳が動揺しているのを、ぼくはわけもわからずじっと見ていた。

「とりあえず、うちはエスカレーターな高校だから、翔ちゃんみたいにガツガツ勉強しなくてもいいのよ」

「そういうもののなの？」

「そういうもののなの」

でも、ぼくはなんだか釈然としなかった。

結花の、ほんとうの夢は、いったいどこにあるんだろう？

第15話（デジャヴ）

結花の制服が夏服に変わり、本格的な夏がやって来ると、ぼくら受験生は、もうまったく遊ぶ余裕なんてなくなってきた。

ひたすら、学校、予備校、自習、就寝…、たまに息抜きのデート。でもぼくは、通学は必ず結花と一緒にすることになっていた。

「おはよう、翔ちゃん」

結花の白い腕が、朝日に照らされてぴかぴかしている。

このときだけが、ぼくの一日のうちでいちばん幸せなひとときだった。

ある日、ぼくらは、途中の駅で乗ってきた和尚とぼったり出くわしてしまった。

和尚は、混雑した電車のなかでひとときわ目立ち、そしてぐいぐいと人並みに押されて、ぼくらの間近にまで来てしまった。

「おはよ」

彼は、どちらにでもなく挨拶した。

「おはよ、和尚」

ぼくは挨拶を返したが、結花は小さくうなずいただけだった。

ぼくは、気まずい雰囲気を打破するために、なにか話題を探そうとした。だが、そんなことは和尚が先にやってくれた。

「翔。こないだ、視力検査したんだって？」

「ああ。両眼とも1.2。ぼくって、パイロットになるために生まれてきたんじゃないのかなあ」

「『月刊エアライン』読ませてもらったよ。このまえ、おまえが机の上に置きっぱなしにしてたやつ」

「ああ、面白いだろ？もう時代はジャンボじゃないけど、ぼくはあれが好きなんだ」

「ボーイング787の出来ってどうなんだろうな。コストパフォーマンス

マンスがいいのは感心だけだ」

ぼくらは申し合わせたように、男同士の会話をした。

結花は取り残されて、満員電車のなかで、じっと身をひそめていた。

電車がキーツと急ブレーキで次の駅で止まったとき、ぼくはふと結花は大丈夫かと思つて隣を見た。

すると、彼女の視線は、ぼくではなく和尚の方にあつた。

ぼくは、とても嫌な予感がした。…いつか、同じような光景を見たことがある……。

あれは、初めて結花と和尚が出会つた、海水浴の帰りの電車のことだつた。

結花は、和尚がはしゃいでいる姿に、釘付けになつて見ていたのだ。

「もしかしたら…」という不安を抑えて、ぼくはその後もしばらく和尚と男の会話を続けた。

和尚も、ぼくの意見に賛成のようだつた。

結花が乗り換えのために電車を降りたとき、ぼくは安堵のため息をついた。そして、演技を終えた二人は、しばらく黙り込んだ。

「…翔」

和尚がまもなく口を開いた。

「ん？」

「彼女とうまくやれよ」

「ああ」

和尚は、まっすぐ窓の方を見て言った。

ぼくは、和尚が、結花を忘れたのではなく、強靱な精神力によって想いを封じ込めている方だと確信した。

ぼくは、窓の風景を見ながら思った。

でも和尚、

今度ばかりは、結花をおまえに渡すわけにはいかない。
ぼくらの卒業は、あと半年余りに迫っていた。

そのあと、和尚はアメリカへ旅立っていくのだ。

第16話（結花のゆらぎ）

和尚と電車で出会ってから、結花は一見なんの変わりも見せなかった。

相変わらず、翔ちゃん、翔ちゃんと言って、ぼくについて来た。でもぼくは、なんとなくそのはしゃぎぶりに、違和感みたいなものを覚えていた。

彼女は、まだ迷っているんじゃないだろうか？和尚のことを忘れて、ぼくを選んだことを。

そんなとき、ぼくは結花の部屋で、旅行のパンフレットを書棚のなかに見つけてしまった。

巧妙に隠してあったが、ぼくには、これは最近引き抜かれたものだということが、すぐにわかった。

《アメリカ・ボストンへの旅》

ぼくは、しばらく呆然と、その明るい表紙を眺めていた。

結花は…、こんなものを見て、いったいどうする気なんだろう。

ぼくは、ときどき、胸が張り裂けそうな気持ちで彼女で見る事があった。

結花はまるで、トライアングルの一角をさまよう子羊だった。

ぼくは、きみを幸せにしてあげたい。

でも、きみは、ぼくじゃ駄目なの？

ぼくは、ベッドで寝ているふりをして、彼女の幸せそうな寝顔を見ていた。そして、少しだけ泣いた。

ぼくだって、エゴの塊だよ、和尚…。

自分の欲求のためなら、大好きな彼女がおまえを想っていても、力づくで奪い取る。

いずれ、おまえはいなくなるんだ。

いまは、ぼくに彼女を引き止めさせてくれ。

でも、ぼくには結花について、どうしても気がかりなことがあった。それは、進路のことだった。

街のあちこちで受験生があふれ出し、本屋が参考書でいっぱいになる時期が来ても、彼女はそれを決めようとしなかった。

「もう間に合わないよ?」

ぼくは、あのパンフレットを見てから、何度も結花に忠告した。

「いいの。お父さんもお母さんも、自分のやりたいことが決まってから、決めればいいって言うてくれてるから」

「少し、呑気すぎやしないか?」

「翔ちゃん。お願いだからもう、そのことは口に出さないで」

結花はその日珍しく、強い口調でぴしやりと言った。

ぼくは、自分を拒否されたようで、なんだか癪にさわった。

「なんだかへんだな。結花って」

「へんつてなによ?」

「…ほんとは、白馬の王子さまが迎えに来るのを待ってるんじゃないの?」

「…翔ちゃん?!なに言ってるの?」

「ぼくよりも、誰かのことを考えてることがある」

「なんで?!そんなこと言うの?」

「じゃあ、これ、なんだよ?!」

ぼくはすばやく結花の書棚のところへ行つて、《アメリカ・ボストンへの旅》のパンフレットを抜き出してみせた。

「ぼくがなにも知らないでも思ってた?」

「翔ちゃん…、ひどい。こんな、勝手に…」

「それよりどういうことだよ。結花、おまえ、和尚について行く気じゃないだろうな?」

結花が震えて泣き始めた。

「……どんなところか見てみたかっただけなの。ほんとにそれだけ。行こうだなんて思っただけ」

ぼくは、ひどくショックを受けた。

やっぱりそうか。結花は、まだ和尚に未練を持っているんだ。

ぼくはいたたまれなくなつて、思わず部屋を出て行こうとした。「待つて！」と結花が言った。

「翔ちゃんのこと好きなのはほんとなの。でも、まだわたし、和尚との赤ちゃんのこと引きずっていて…」

ぼくは、息をのんだ。

赤ちゃん…赤ちゃんか…。

ぼくは、また敗北感を味わった。同じだ…、あのときと同じだ…。でも、ぼくはあのときほど、弱い男でもなかった。

「和尚は赤ちゃんを授けてくれたかも知れないけど」

ぼくは冷たく震える声で言った。

「いまの、きみの彼氏はぼくだから。和尚はきみのところへはもう、帰ってはこないよ」

「…わかつてる」

「わかつていればいいんだ」

ぼくは、結花を優しく抱きとめた。結花は、やや身体を固くしていた。

「これからいろいろあると思うけど、ぼくは結花とずっと一緒に生きていきたい」

「…うん」

「結花が進路を決めないならそれでいい。いざとなれば、ぼくがきみを養う」

「え」

結花が一瞬、小声をあげた。ぼくは急いで、「冗談っぽく言った。赤ちゃんが欲しいなら、ぼくが産ませてやるよ」

結花はくすつと笑って、ありがとと寂しく言った。

結論的に、ぼくはぼくなり道の道をしつかり歩むしかなかった。

ぼくは、いつも和尚と自分を比べてきた。けれど、もう、そういう時期は終わりに近づいている。

ぼくら進学組は、受験のラストスパートに入った。矢野も愛子も、みんな必死で、会えば試験の話しかなかった。

「どうやら、上手くいったみたいよ」

センター試験の終わった翌日、愛子は電話をかけてきて、ほつとした口調で言った。

「もうおれは駄目だ~~~~!!」

矢野に電話をかけてみると、彼は電話の向こうでオーバーアクションしていた。

「それで、おまえはどうだった、翔?！」

「うん。なんとかいけそうよ」

ぼくは、自分と結花との未来を信じて、ひたすら前へ走るしかなかった。

結花との未来を信じて。

第17話（卒業）

長かった受験がようやく終わった。

ぼくらは、とりあえず全員、進路が決まった。

ぼくは、地元の国立大学の工学部に進学することになった。ただし、予定ではこれから先2年で、航空大学校に編入になる。

卒業式の日、ぼくらのクラスは、アメリカの大学生がやるのを真似して、帽子のかわりに上履きを投げた。

ばたばたと上履きが上から落ちてきて、それはもう悲惨な騒ぎだった。

和尚が、笑いながらぼくの上履きを放り投げてくる。

「バカだよな。おれら」

「見ていて気持ちいいくらいにな」

「ところで、和尚はどうすんの。入学は9月だろ？」

「ああ。今週末に向こうに行くことにしたよ」

「ええっ?!」

あまりの急さに、ぼくは驚きの声をあげた。

「そっか…、ぼくはまだ、こっちにいるのかと思ってた」

「日本にいても仕方ないだろ」

「じゃあ…、」

もう、和尚とは会えなくなるのか。

ぼくは、突然、彼と出会ってから、いろいろあつた高校時代を思い起こして、きゅっと胸が痛くなった。

「和尚。便はいつ？」

「土曜日の14:35発のノースウエストだよ。途中、デトロイトで乗り換えて、それからボストンに住んでる叔母さんの家に行く」

「いよいよ、ほんとうの別れのときが来たのか。」

「…見送りに行くよ」

「ありがとう。おまえの好意は忘れないよ」と和尚は素直に笑った。
「結局、おまえは“USA!”を叫ぶ側へまわったってことだな」
「まあそういうことだ」

和尚は、1年のとき、初めてぼくらが交わした会話を忘れてはいなかった。

和尚との別れの日、ぼくは着古したジーンズにジャケットを羽織って、早めに出かけようとしていた。

そのとき、キンコンと玄関の鐘が鳴った。母が、「あらまあ」と声を上げる。

部屋に入ってきたのは、結花だった。

「あれ？どうして来たの？」

「ううん、なんとなく。翔ちゃんの顔が見たくなつて」

「ああ……でも悪いな。今日はちよつと出かけないと」

ぼくは、結花に、和尚の旅立ちを教えていなかった。

「翔ちゃん、いつもと雰囲気違うね」

「ああ、ジャケットのせいかな？いつもは破れたダウンだからな」

「ふうん」と言つて、結花はそのへんのものをちらちらと見ていた。

「どうしたの。落ち着きがないね」

「だって。翔ちゃんがどこへ行くのか気になつて」

「今日は一緒に行けないよ」

「どうして？どこへ行くのかだけでも教えて？」

そこへ、母が紅茶とケーキを持って、部屋に入ってきた。

「結花ちゃん、食べていつてね。このケーキ、頂き物だけどすごく美味しいのよ」

結花ははい、と言いながらも、床に座ろつとしなかった。

ぼくはそのとき、なんとなく結花は、今日が和尚との別れの日だ

と知っているんじゃないかという気がした。

でも、もうきみは遅かった。いまさら、どうすることもできやしない。

「じゃあ言っけど」

「うん」

「成田空港だよ」

「え？」

「今日、和尚がアメリカへ行くの」

「……………そうなの……」

「結花。きみはケーキを食べたら、自分の家で待っていてくれないか。帰りに寄るよ」

そう言って、ぼくはそつと部屋を出た。

そのあと、結花が、和尚が泣きながらつくった、大人と子どもの切り絵を発見することも予想せずに。

第18話（空港での別れ）

『アジアナ航空102便は、ただいまソウルから到着しました。』
…

空港は、思ったほど混雑していなかった。

和尚の見送りには、愛子も来ていた。ぼくは愛子に、「おまえ、裏切ったな」とこっさり言った。

「なにを？わたしが??」

「結花に、この日を教えただろう」

「だって話に出たから。翔ちゃんと一緒に行くから、そのとき一緒にお茶でもしようねって」

「ぼくが??結花と愛子と??」

「ちがうの?」

ぼくは、結花が和尚の出発の日を、自分から知りたがったことに胸がざわついた。

「あつ、知り合いがいる！翔ちゃん、ちょっと和尚に伝えてて」

愛子が飛び跳ねて、数メートル離れた場所へ行つたとき、和尚がツイードのジャケットに、肩からデイバッグをかけて、出発ロビーのまえに現れた。

ぼくは、彼を真正面に迎え入れた。

「いよいよだな」

「まあな。やつとこれからって気もするけどな」

「愛子、あつちで知り合いとしゃべってるぜ」

「相変わらず、変わったやつだな。…まあ、またそのうち会えるさでも、ぼくは思った。そのうちなんて、別れの言葉と同じだと。」

空港のアナウンスが流れた。

『ノースウエスト航空12便デトロイト行きは、ただいま最終の出発案内をしております。…お急ぎ手荷物検査場へお越しください。』

そのとき、「ゆかあゝ！」という愛子の声が聞こえた。
ぼくと和尚は、同時に愛子の視線の先を追った。

そこには、結花がいた。

彼女は、小さな荷物とともに、あの切り絵を握りしめていた。

「和尚……」

ぼくはいけない、と思った。結花が、和尚に連れ去られていく。

和尚が動揺したのが受け取れた。

やがて、彼と結花との距離が接近し、和尚はデイバッグを肩から外した。

彼らは、一瞬ぎゅっと抱きしめ合った。

だが、和尚はすぐデイバッグを手にとって、後ろを向いて手荷物検査場へ大股で歩いていった。

「和尚！」

結花が叫ぶ。

「わたし、チケット持ってるのよ！」

和尚が一瞬、振り返って凍りつく。

ぼくは、もう駄目だと思った。

「来るな！」

その瞬間、なぜかぼくの手は、結花の背中を押していた。

「行け！」

不審に思った警備員が、結花に近づいていく。

和尚は、彼女の手をとって、警備員になんでもないんだ、というふうに伝えた。

そして、ぼくを振り返りながら、2人は出発ロビーのなかへ消えていった。

「さよなら。結花、和尚」

これが青春の1ページってやつですか。

ぼくはもう、50ページはめくってしまったような気がする。これ以上はない。

結花と、和尚と、ぼくの青春物語は終わってしまった。

ぼくのそばに、愛子がやって来る。

「あれ？結花は？どこへ行ったの？」

ぼくは、その質問には答えられない。

涙で、なにも答えることが出来なかった。

第18話（空港での別れ）（後書き）

〽次回、エピソードに続きます。〽

エピローグ

いくつもの年月が過ぎ、ぼくは念願のパイロットになった。

まだ年齢的には副操縦士だが、やがて機長になる日も近いだろう。愛子は、新聞記者になって、地方を飛び回っているらしい。いまは、年賀状をやり取りするくらいの関係だ。

ある日、ぼくがニューヨークの一角にあるバーに入ると、驚いたことに、そこに和尚がいた。

「……！！元気かよ?!」

ぼくらは、再会を喜び合って、乾杯した。

彼は、ウォール街の辣腕証券アナリストになっていた。

「いろいろあったけど、ぼくもいま二人の子持ちだよ」とぼくは言った。

「おれも」

「まさか空港で別れてから、おまえからあんなサプライズをもらえるとは思ってもみなかったよ」

「ああ。あのときな」

「おまえが、結花を日本に帰したんだろ？」

「そうだ。結花にとって、どう考えても海外生活は重荷だったからな。デトロイト空港で説得して、すぐ成田への直行便に乗ってもらった」

「いっぱい泣いたか？」

「ああ」

ぼくはビールを二杯頼んで、やつに一杯おごってやった。

「彼女のその後、知りたい？」

和尚はぼくの顔をX線ビームでじっと見て、そこになにかを見つけたようだった。

「聞かなくてもわかったよ」

ニヤリと笑う和尚の顔に、ぼくは、懐かしい高校時代を見た。

ぼくらは、どちらからともなく、互いの子どももの写真を見せて自慢し合った。

ぼくと結花のあいだに出来た子どもは、二人とも彼女似の超美人だった。

(了)

エピソード（後書き）

最後まで読んでくださった方々、
ほんとうにありがとうございました。
ぺこり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6379d/>

トライアングル・LOVE

2010年10月8日15時46分発行